

惠岡（崔漢綺）の「気学」 ——唯物論、経験主義、理気論——

朴 炳 建

1. 本稿の目的

本稿は、朝鮮思想史上重要な思想家である惠岡（崔漢綺）（1803–1877）の思想を紹介するとともに、朝鮮思想史上での再評価を試みることを目的とする¹⁾。なお彼の本名は崔漢綺であり、惠岡は号であるが、韓国では惠岡の呼称が一般的に用いられているので本稿でも、彼の号を使用するものである。

惠岡の名は日本ではほとんど知られていないが、以前は朝鮮思想史の上でも知名度は低かった。しかし1960年代以降に朝鮮思想史研究者達から突然注目されはじめ、北朝鮮では「唯物論哲学者」、また韓国では「経験主義思想家」として高く評価されるようになった。本稿では、なぜ惠岡が“60年代”に突然朝鮮思想史研究者の注目を集めることになったのか、また彼の思想は朝鮮思想史研究の文脈上でいかなる意味を持つか、という問題を解明したい²⁾。

惠岡は1803年に開城で生まれ、少年期に家族と共にソウルに転居し、1877年に死去するまでソウルを離れなかった。当時の朝鮮文化の中心地であったソウルで一生を過ごし、膨大な著作を残したにもかかわらず³⁾、他の儒学者達にその思想が知られていなかったということは、惠岡の思想が当時の朝鮮儒学のパラダイムでは受容され難いものであったことを示していると考えられる⁴⁾。この「受容され難い」思想体系が「気学」という惠岡自身の学問体系であった。また、彼の「気学」は西洋科学の影響を幅広く受けたと言われる。確かに、そのことは事実であるが、惠岡の思想の西洋科学の影響という面ではなく、朝鮮儒学の弱点を補ったという点に注目するというのが、筆者の視座である。以下考察を始めよう。

2. 1960年代における惠岡の評価

惠岡の名が韓国哲学史に登場するのは、1962年に北朝鮮で出版された『朝鮮哲学史』（初版序文、1960年）が最初であろう。この本の共著者の1人である鄭聖哲は、「崔漢綺（惠岡）の思想は都市中産層の利益を代弁する唯気論であった。」⁵⁾と評価している。5年後、韓国の朴鍾鴻は彼の論文「崔漢綺の経験主義」において、惠岡の思想を「経験主義」あるいは「科学哲学」として韓国哲学界に紹介した⁶⁾。このように惠岡が1960年代に韓国思想史上に突然登場したのは、当時の北朝鮮が中国の思想史方法論である「歴史的唯物論」に強く影響されていたこと、また韓国では1962年に出版された『朝鮮哲学史』の日本語翻訳本が契機と

なったことに原因があった。

1949年、毛沢東(1893-1976)が中国大陸に中華人民共和国の成立を宣言して以来、共産主義政権の下で中国の学者達は、マルクス-レーニン主義の歴史発展論を中国史の解釈に適用しようと奮闘した。これは換言すれば、マルクス-レーニン主義による中国哲学史再解釈の試みであった。毛沢東によれば、マルクス-レーニン主義は西洋の伝統に基づいて理論化されたものだが、中国の伝統の中にも既に内在している(毛沢東主義)のであった。ここから中国の哲学的歴史記述論は新しい局面を迎えた。マルクス-レーニン主義、すなわち「上部構造」は「下部構造」によって決定される、あるいは「人間意識」は「物質的条件」に属するという命題を中国哲学史に適用すれば、それまで絶対的な権威を誇ってきた孔子、孟子、朱子などの思想は、物質的な条件によって決定されたそれぞれの属する「階級」の利益を代弁しているにすぎないことになる。例えば孔子の場合は、「古代奴隷制」から「封建制」への移行期に、没落した奴隷所有者階級の利益を代弁した極右翼的理想主義者、歴史的な反動思想家に転落する。この文脈では、中国思想史は「支配階級」と「被支配階級」、「唯物論」と「唯心論」の対立の図式で記述され、最後には「唯物論」が「唯心論」より上位を占めるのである⁷⁾。

このような毛沢東主義に従って書かれた『中国思想通史』(1958)から2年遅れて刊行された北朝鮮の『朝鮮哲学史』(1960)は、毛沢東主義の歴史記述論に忠実に従っている。朝鮮時代に「理気二元論」を主張した李退溪(1501-1570)は「唯心論」の代弁者とされ、「気一元論」を主張した徐敬徳(1489-1546)と「唯気論」を主張した任聖周(1711-1788)は「唯物論思想家」とされて、朝鮮哲学史上に新たに位置づけられている。このような文脈の中で恵岡は、朝鮮哲学史で最も偉大な唯物論哲学者として評価された。『朝鮮哲学史』では次のように述べられている⁸⁾。

崔漢綺は、当時、社会的な矛盾と民族的な危機を自覚しながら、自己の深い自然科学知識にもとづいて、当時の進歩的な都市平民階級の利益を代弁するすぐれた独創的な唯気論哲学を樹立した。⁹⁾

こうして恵岡は北朝鮮の『朝鮮哲学史』において初めて朝鮮哲学史(韓国哲学史)上に登場し、傑出した唯物論哲学者であるとの評価を得たのであった¹⁰⁾。

『朝鮮哲学史』が1962年に日本語に翻訳されると、この翻訳版が韓国学者の間で広く読まれたと考えられる。しかし彼らは、新しく発見された思想家に附与された「唯物論者」という評価を、韓国の政治状況の中で受容できるように再解釈しなければならなかった。このような努力を行なった学者のひとりが朴鍾鴻である。1965年に恵岡を韓国思想界に初めて紹介した際、彼は次のように述べている。

従って、恵岡の新たな経験主義思想が無定見な事大精神の所産ではなく、著しい主体意識を下敷きにしていることがわかった。実に、恵岡は伝統的な儒学思想を実証的・科学的な近代化と関連付け、新たな態度で発展させることによって、その根本精神を時代的に生かそうとした。そうして、西洋の科学技術を導入・摂取する精神的姿勢と基本的な哲学的理論を闡明した、といえる。¹¹⁾

朴鍾鴻は「唯物論者」というイデオロギー的な表現を避けなければならなかった。そのため彼が目にしたのが恵岡の「推測理論」であった。恵岡の「推測理論」は人間の認識に関する独創的な理論である。人間は外部世界を「推」すなわち感覚器官を通して受容し、「測」すなわち推理によって客観物の存在と機能を把握する。この「推測」行為は人間の意識内の問題なので、認識の客観性を保証するためには「検証」という段階が必要であると恵岡は述べている。朴鍾鴻は、この「推測理論」が感覚や検証を強調していることに注目して、恵岡を「経験主義者」として評価した。

また、1971年に恵岡の遺作を集めた『明南樓叢書』を出版した李佑成は、この本の中で恵岡の家系と年譜を整理し、「崔漢綺は19世紀朝鮮における実学と開化思想との架橋であった」と結論づけた。このような評価は、北朝鮮の「唯物論者」という毛沢東主義的イデオロギーに基づいた評価に対して、当時の緊迫した政治状況からの干渉を逃れて、恵岡の思想を韓国思想史の中に新たに位置づけようとした斬新な試みだと考えられる。しかし恵岡の思想体系は伝統的な儒学のパラダイムから離れていないとするならば、李佑成の説には疑問の余地が残るだろう¹²⁾。

一方、北朝鮮の学界では恵岡に対しては「唯物論者」という規定で一貫している。1974年に鄭聖哲はその著『実学派の哲学思想と社会政治的な見解』の中で、「崔漢綺の哲学思想の哲学史的な意義は、彼が朝鮮封建時代の唯物論の伝統を継承・集大成して、唯物論の発展の最高峰に登ったということにあり、特に、認識論、弁証法、論理学の分野には世界哲学発展に寄与したということにある」¹³⁾と述べている。さらに韓国では、70年代に恵岡研究に寄与した機関は「民族文化推進会」であり、『人政』(1977)や『氣測體義』(1979)を現代韓国語(朝鮮語)で翻訳・出版している。琴章泰、尹絲淳はそれぞれの翻訳版の解題を通して、恵岡の思想に対するそれまでの評価を紹介しながら、西洋科学を積極的に受容した独創的な思想家として評価した¹⁴⁾。この翻訳が以後の韓国における恵岡研究の基礎となっている。

このように恵岡の思想は、北朝鮮側では「唯物論哲学」、韓国側では「経験主義」という構図の下で研究されてきた。また年代的に見て、韓国側の研究は北朝鮮の先行研究の影響を受けたのではないかと推測されるが、両者が参考とした恵岡の著書を比較すると、興味深い相違がある。恵岡の重要な哲学関連著作は『氣測體義』、『氣學』、『人政』、『承順事務』などであるが、北朝鮮で出版された『朝鮮哲学史』や『実学派の哲学思想と社会政治的な見解』には、この内の『氣學』に関する言及が出てこない。『氣學』は恵岡自身が自らの思想を

「気学」と呼ぶほど、彼の思想理解にとって重要な著書である。気の属性を「活・動・運・化」に規定し、宇宙と人間の社会を気の「活・動・運・化」する属性によって説明しようというもので、惠岡の思想の核心をなす著書であると言ってよい。北朝鮮で『氣學』が発見されていたならば、必ず『朝鮮哲学史』や『実学派の哲学思想と社会政治的な見解』で言及されている筈である。つまり『氣學』という書物は北朝鮮では発見されなかったのであり、ここに韓国側の初期惠岡研究における『朝鮮哲学史』の日本語翻訳版の重要な役割があると考えられる。

つまり、韓国の朴鍾鴻は論文「崔漢綺の経験主義」では『氣學』に言及しておらず、もっぱら『朝鮮哲学史』で紹介された『氣測體義』を巡って論議を展開している。『氣測體義』は1830年代到北京で出版されているので、北朝鮮でも韓国でも比較的容易に入手することができたと考えられる。しかし『氣學』は出版本ではなく筆写本であり、舊藏書閣¹⁵⁾が所蔵しているので、韓国では閲覧が容易に可能であったと考えられる。一方、北朝鮮側の学者がその内容について言及していないならば、北朝鮮には存在していないということになるだろう。朴鍾鴻は『朝鮮哲学史』の中で言及されている『氣測體義』という本だけでも早急に探す必要があったと推測される。換言すれば、朴鍾鴻にとっては、『氣學』という本を探して読む時間がないほど、日本語訳の『朝鮮哲学史』が衝撃であったのではないだろうか。1974年に崔岐洪によって出版された『韓国哲学史』にも同様のことが伺える。この本で崔岐洪は、惠岡を朝鮮の実学者として紹介しているが、当時既に『氣學』は公開されていたにもかかわらず、それに関する言及はない。おそらく彼の惠岡研究は『朝鮮哲学史』の日本語翻訳本か、あるいは朴鍾鴻の論文を基盤としたものだと考えられる。

『氣學』は、1971年に李佑成によって編集された『明南樓叢書』の一部として学界に公開されたが、この『明南樓叢書』は『人政』および『氣測體義』の現代韓国語（朝鮮語）の翻訳版（それぞれ1977年、1979年発行）とともに後の惠岡研究の動向を決定づけることになった。80、90年代には惠岡に関する論文の量が非常に増加している。

ここで論点を整理しておこう。惠岡は1960年に北朝鮮の学者たちによって発掘され、『朝鮮哲学史』で初めて広く紹介されたが、中国の毛沢東主義に基づいて「唯物論哲学者」として評価された。1962年にこの『朝鮮哲学史』の日本語訳が出版され、これが韓国側の学者に衝撃を与えたと同時に、学者たちは惠岡をイデオロギー的ではない哲学言語で解釈しようと努力した。その結果、1965年以降の韓国では惠岡の思想は「経験主義」とみなされた。70、80年代になると惠岡研究は、北朝鮮の「唯物論哲学者」、韓国の「西洋思想を積極的に受容した経験主義思想家」に二分されて、そのまま現在に至っている¹⁶⁾。

3. 崔惠岡（漢綺）の思想の特色

このように惠岡の評価は北朝鮮と韓国で分かれているが、筆者は、惠岡の思想は朝鮮儒学における「理気論」の発展上に位置づけることが必要であると考えられる。そのために、まず惠

岡の思想の特色を整理しておこう。

恵岡は自身の思想の基になるものは「気」と宣言する。

克塞天地漬洽物體而聚而散者不聚不散者莫非氣也。我生之前惟有天地之氣、我生之始方有形體之氣、我没之後還是天地之氣。¹⁷⁾

このように「気」を主要な構成要素として、宇宙や人間の全てを理解しようとしている¹⁸⁾。そこで、恵岡の思想体系を理解するためには、まず彼の最も重要な著作である『氣學』及び『氣測體義』について検討しなければならない。『氣學』では彼の思想体系が説明されており、『氣測體義』は認識理論¹⁹⁾に関する著作である。特に『氣學』は、『氣測體義』から始まった恵岡の思想の結晶体であり、彼の思想体系の集大成ともいえる重要な著作である。

一方、『氣測體義』は人間の認識一般に関する「論文」である。ここで「論文」という意味は、彼の論述形式が伝統的な形式とは異なっているという意味である。伝統的な儒学の著作の論述形式としては、經典の注釈を通じて自分の思想を披瀝する方法をとるが、恵岡の場合は、まず自分の考えをひとつの段落にまとめ、次の段落ではそこで述べられた主題に関する解説を述べるという方法によって、古典の經典にとらわれず、自らの思想を自由に論述している。この形式は恵岡の全著作に共通である。

また、『氣測體義』は朝鮮思想史的パラダイムから見ると、形式的だけではなく、内容的にも珍しい著作である。『氣測體義』は『神氣通』と『推測録』の2つの本で構成されている。『神氣通』は「気」の理論に基づいて、認識の主体（神気）や認識の可能性に関して解説しており、『推測録』は認識の過程や方法について述べている。これらの本の題目には、恵岡の独特な哲学用語が用いられている。つまり、認識理論書を著す儒学者は、当時としては希有であったため、自らの思想を独自に創出した用語によって語らざるを得なかったということである。この本は1838年に北京の「人和堂」で出版された²⁰⁾。

『神氣通』では主体と客体を同一な「気(神気)」であると把握しながら、主体がいかにして客体と「通」するのかという問題に関して述べている。「通」は恵岡哲学の核心的な概念のひとつであり、その意味は「障碍なく通じる」と定義される²¹⁾。恵岡は人間を「神気」という、精神的な要素や物質的な要素の合体概念で説明する。つまり、人間は「気」という物質的な要素から構成され、「気」から現れる人間の精神的な現象を「神」と名づけた²²⁾。恵岡にとって「精神的な能力を備えた気」、すなわち「神気」は人間や宇宙を説明する基本要素としてとられている²³⁾。また、恵岡は人間の外部との疎通チャンネルとして「形質通」を立てる²⁴⁾。

『神氣通』は「體(体)通」、「目通」、「耳通」、「鼻通」、「口通」、「生通」、「手通」、「足通」、「觸(触)通」、「周通」、「變(変)通」という各論で構成されているが、「體通」は彼の「通理

論」の総論であり、「周通」は「通理論」の理想的な状態（あまねく通じる）に関する説明の段落であり、「變通」には障りをいかにして除去して「周通」の状態に至るのかが論じられている。このように『神氣通』は人間の認識一般に関する基本的な概論であるともいえる。

次に『推測録』では外部との疎通チャンネルを通してデータを「推測」する過程について叙述している。この場合の「推測」はひとつの単語ではなく、「推」と「測」という各々の意味を持っており、これは恵岡哲学の特殊な用語である。恵岡によれば、「推」は「因」、「以」、「由」、「遂」の意味を持ち、「測」は「量」、「度」、「知」、「理」の意味を持っている²⁵⁾。つまり、「推測」は「根拠による調査から得られた情報に従って一般法則を推測することであると定義できる²⁶⁾。認識論的な観点から理解すれば、感覚データ等のような様々な外部からのデータが人間の感覚器官に受容され、通過するとき、認識主体である人間はそのデータに関する因果関係を分析する（推）。そして分析されたデータに基づいて、認識主体は次に受容されるであろうデータや取るべき行為を予想する（測）。この2つの過程は1回的なものではなく、「周通」の状態に至ることを目指して、認識主体の中で何度も繰り返される（推測通）。このような恵岡の「推測」において最も重要な要素は、「推」に検証過程が含まれていることである²⁷⁾。恵岡自身は「證驗(証験)」という言葉を用いているが、これは、1回目の「推測」過程が終わって「測」されたデータを、2回目の「推」の資料として使う前に、「証験」すなわち検証過程を通すことによって、「測」されたデータが根拠のあるものであるかどうか検証することである。この検証過程は恵岡の「気学」システムの基本的立場として、彼の全著作に通底している。

1857年に書かれた『氣學』は2つの部分によって構成されており、前半部は序文と100の段落で、後半部は125の段落と、彼の息子の柄大が父のために書いた後書きとで構成されている。前半部では恵岡は、既存の学問を「中古之学」、すなわち、時代に後れて現実の状況に合わない学問であると評して、「気学」という新たな学問体系創出の必要性を強調している。また、「気学」と他の学問体系との異なる点を説明するために、恵岡自身の哲学用語を紹介している。後半部では、前半部で紹介された用語に基づいて恵岡自身の思考体系（気学）を構築している。

『氣學』における重要な概念は「活」、「動」、「運」、「化」であるが、これらは各々「気」を説明するのに伝統的に使われてきた概念である。しかし、その4つをまとめて「気」の属性として扱ったところに恵岡の語法の独自性がある。具体的には、恵岡は「活」や「動」は「気」の本性であり、「運」や「化」は「気」の現れるパターンであると考えており、次のように述べている。

活動運化統而觀之、生氣常動而周運大化也。²⁸⁾

……以活生氣也、動振作也、運周旋也、化變通也。²⁹⁾

以上、見てきたように、恵岡においてもっとも重要な概念は「気」であった。恵岡は自身の思想を「気学」と名づける以上、「気」とはいかなるものであるか、すなわち「気」の属性に関する質問に答える必要があった。『氣學』はそのための労作であったといえよう。

4. 朝鮮思想史における「気学」の意味

それでは、恵岡の「気学」が朝鮮思想史上、いかなる位置を占めるかという問題について、再び考えてみよう。崔惠岡（漢綺）という思想家は、西洋の科学知識を幅広く受容し、朝鮮の伝統的な学問方法に従わなかった点において、朝鮮思想史上に独特な位置を占める人物だと言われている。一般的に朝鮮時代の学問方法は「性理学」あるいは「朱子学」であったが、恵岡はこの朱子学のパラダイムに従わず、漢訳西洋科学書に基づいて独自の思想体系を構築した。それが「気学」である。筆者は従来の研究結果を踏まえながら、思想史的な観点から恵岡の思想を2つの面から分析してみたい³⁰。ひとつは、恵岡の西洋科学への関心は「気」という物質的な存在要素によって外部世界を解明しようという努力から導き出された自然な結果であったという点であり、もうひとつは恵岡の思想は朝鮮における朱子学の理論的な展開の頂点にあるという点である³¹。

第一に、物質的な存在要素である「気」に基づいて外部世界を解明しようという努力をしたということは、恵岡が認識理論で「推測」という語によって強調した検証可能性と結び付けられる。まず、恵岡の思想には、「気学」ともいわれるように、物質的な外部世界が重要視されている。彼は次のように語る。

無方無形、窮萬歳而不可得驗者、存而勿論。³²

これは「検証できない存在は存在しても語らざるべし」という意味だと考えられる。また恵岡は、儒学の核心概念である「天」、「人」、「理」などについて、その存在の根拠を外部的な客観世界に求めた。このような思想傾向は、恵岡にとって西洋の自然科学を積極的に受容する契機ともなった。実際、恵岡は20代で漢訳西洋科学書の解説書の出版を考えるほど、西洋の自然科学を深く探求していた³³。この事実は彼の著作上でも確認できる。例えば『星氣運化』は、John Frederik William Herschel (1792-1871) の *The Outlines of Astronomy* を Alexander Wylie (1815-1887) が漢訳し、上海で1859年に『談天』と題して出版した著作を、恵岡自身が編集したものである。『身氣踐験』はイギリス人の医者で且つ宣教師でもあった Benjamin Hobson (1816-1873) 著の『全體新論』を、『運化測驗』は Alfonso Vagnoni (1605-1640) 著の『空際格致』を、『心器圖説』は Joannes Terrenz (1576-1630) 著の『奇器圖説』を、各々編著したものであった。

これらの著作活動に見られる恵岡の基本的な意図は西洋科学の紹介であったが、これらの著作のすべてが「気学」という彼独自の思想システムの問題意識に基づいて思索されている

点が大変重要である。それは、すべての理論は検証過程を通すべき、ということである³⁴⁾。

たとえば、中国思想において、「天」の意味は5つに要約できる³⁵⁾。第1には物質的・物理的な「天」——そら、第2には主宰している「天」——帝、第3には運命的な「天」、第4には自然的な「天」——宇宙の秩序、第5には道徳的な「天」——道徳的原理である。天文学的には、漢代以後、一般的に「渾天説」と「蓋天説」³⁶⁾との対立として発展してきたが、儒学における「天」はおおよそ第4と第5の意味を中心としている³⁷⁾。それに対して恵岡は、伝統的な「天」の意味を西洋の天文学から具体化することが可能であると考えて、次のように西洋の宇宙説を称賛している。

至哉！ 地球之論。明天地之正體、哲于古之長夜。³⁸⁾

このように恵岡は、「天」という意味を西洋天文学の成果に基づいて、「太陽系」として把握したのである。

また、恵岡の思想体系は、すべての理論において、証明可能であるかを問うというプロセス、すなわち、検証過程に基づいて成立している。その結果、恵岡は漢訳西洋科学書の編著の際、キリスト教の神や靈魂に関する表現を、全て「気」という言葉で置き換えるか、削除している³⁹⁾。恵岡は物質的に存在する「気」を主な構成原理として、宇宙と人間とについての説明を試みたともいえる。そのために彼は西洋の自然科学の成果を幅広く受容し、検証の資料として使ったのである。

それでは「気学」という恵岡の学問体系は朝鮮儒学史の文脈上にどのように位置づけられるのか。まず、朝鮮儒学史の専門的研究者の間では、「主理派」、「主気派」という言葉が一種の慣用語として使用されていることに注目したい。たとえば玄相允の『朝鮮儒學史』（民衆書館、1949年）、裴宗鎬の『韓國儒學史』（延世大學校出版部、1974年）、劉明鍾の『朝鮮後期性理學』（以文出版社、1985年）、チェボンイクの『朝鮮哲學史概要』（平壤社會科學院出版社、1986年）などでは、朝鮮儒学を主理・主気の対立構図として記述している。

この主理・主気分類法は、元京城帝国大学教授高橋亨（1878-1967）が、1929年に『朝鮮支那文化の研究』という雑誌の中で発表した、「李朝儒学史における主理派主気派の發達」と題された141頁に及ぶ膨大な論文から始まっている。高橋は「四端七情論争」に基づいて、退溪李滉（1501-1570）を主理派の始祖として、また、栗谷李珣（1536-1584）を主気派の始祖として位置づけている⁴⁰⁾。

朝鮮儒学上の「四端七情論」は人間の道徳的行為の可能性を朱子学の「理気論」によって解明しようとする道徳論論争であった。これは、退溪が道徳的な行為の可能性を守るため、善と悪が両方含まれている「気」から善だけを含む「理」を独立させ、「理」そのものに自発性を与えたところから始まった議論であった。これ以後の朝鮮儒学では、この退溪式の「理学」の伝統が強く続いていく。しかし、これはもともと退溪の「理發」をめぐる議論で

あったので、「気」そのものの本質を深く探求しようとする議論は行われなかった。尹絲淳は、この問題に関して次のように述べている。

もし、有機的な宇宙観が気の聚散に基づいているとしたら、その気の属性に関して本質的な説明がなければならない。この点で、こじつけかもしれないが、いのちそのものに関する理論があるべきである。⁴¹⁾

ここに、朝鮮儒学史における恵岡の思想の位置付けについての可能性が見えてくる。朝鮮儒学における最大論争であった「四端七情論」は、「理気論」に基づいている以上、気の生命性を否認できない。退溪の「理発論」はあくまで「人間の道徳性」を問題にする議論であったために、その根本としての「気」そのものに関する議論は以後も行われてこなかった。したがってこのような流れから見ると、恵岡は朝鮮儒学史において初めて「気」の本質を探究し、その属性を定義した人物ということになる。つまり「退溪の理学」ともいえる朝鮮儒学思想の伝統の中で、本質的な「気」に関するディスコースを始めたといえるであろう。

それでは恵岡が提示した「気」の属性とは如何なるものであろうか。恵岡はこれについて、『氣學』の中で詳しく論じている。まず、「気」の属性については「活」、「動」、「運」、「化」の4つに定義している。最初の「活」は「気」の生命力を意味する。「気」は「生きているもの」という主張は彼の全著作に共通して流れている基本的なアイデアである。恵岡にとって宇宙は無生命的・機械的な存在ではなく、自律的に循環・変化するものである。宇宙が自律的な秩序を保持できる根本原因が「活」、すなわち生命力である。「気」の生命力である「活」は、「気」を理解するために大変重要な基本的属性である。

2番目の「動」は、「気」の運動性を意味する。生命体の基本的な特徴は「動いている」ことにあるように、「気」の世界では停止しているものは存在しない。恵岡は次のように述べている。

有動無靜、安動曰靜、動中有靜靜中有動、分別雖細總歸于動。⁴²⁾

つまり、一見停止している（「靜」）ように見えるものも、実は動きが一定のパターンを維持している（「安」）だけのことであるから、結局のところ「動」に還元されるのである。

3番目の「運」は「回る」の意味である。恵岡は「運」の意味に関して次のように説明している。

運有旋轉不息周遍無碍之義、非先轉何以繼承、非周遍何以廣達大氣之運、由於活動之性而旋轉不息之間自生大力、飛輪雖小猶生其力、況大氣之運乎、是以能載運諸曜撐巨上下無限變化隨運而發。⁴³⁾

「運」は基本的に「障碍なく気が循環しながら、どこでも回る」という意味である。循環は同じ事実を反復するという意味ではなく、その事実の現れるパターンが同じであるということの意味する。たとえば季節の変化を例にとれば、毎年春から冬まで季節は移り変わるが、去年の春と今年の春が全く同じであるということはない。各々の生命力や運動性を持った各々の季節が、単に同じパターンに従って繰り返し現れるのである。恵岡にとって、宇宙の万物には固有の「運」があるので、これを「推」によって受容すれば、我々人間は次に起るであろう現象、すなわち「未来」を予測することができ、そこに法則（理）を想定すること（「測」）ができる。「運」には「どこでも回る」という意味が含まれており、そのことから恵岡は、彼の時代における東洋と西洋の文明融合の可能性を、「運」という気の属性から見いだそうと試みている。

4番目の「化」は「変化する」という意味である。恵岡は次のように述べている。

化字訓詁、萬物生息曰化、以德化民曰化、教行于上風動于下謂之化、凡言改易曰變化、革物曰化、能生非類曰化、化之義從其運轉而隨時有化、非一時化之而止之也。⁴⁴⁾

このように恵岡は「化」に関する伝統的な解釈について「変化する」、「生じる」という2つの意味に略して説明しながらも、むしろ連続性を強調している。「気」は時間に従って連続的に変化する。たとえば、我々が水の入ってるコップを見ている場合、10分前のコップと、現在見ているコップとははたして同じであるのか。恵岡の理論によれば、コップも我々も各々の存在のパターンを維持している（「運」）。しかも、コップも我々も各々時間に従って変化している。そして、その変化が連続であるのだという意味になるだろう。認識論的には、変化している客体を変化している主体が認識することになるが、恵岡は「化」の性質をもっと宇宙論的に解釈している。そのため、「民の教化」、「万物の生滅・変化」などの事項も、「化」の原理で説明しようのである。

20世紀の世界を間近に望んでいた恵岡は、「推測」という独自の学問方法論に基づいて既存の儒学の諸概念を検証しようとした。その結果として西洋の科学、特に天文学を積極的に儒学に導入し、「気学」という自身の学問体系の中に反映させたのであった。また、恵岡はそれまでの朝鮮儒学史の発展の上で議論の外に置かれていた「気」の本質に関する議論を開始し、「気」を「活」、「動」、「運」、「化」、すなわち生命性、運動性、「気」の回ること、「気」の変化することを属性として把握し、「気学」という膨大な学問体系を構築したのである。

5. 結論

本稿では以下の3つの点を明らかにした。第1に、朝鮮思想上、無名であった恵岡（崔漢綺）が、1960年に突然注目されたのは、中国の歴史唯物論に基づいて北朝鮮から出版された『朝鮮哲学史』が契機であった。この本で恵岡は「唯物論哲学者」とされ、以後の恵岡

研究の道が開かれた。1962年に日本で出版された『朝鮮哲学史』の日本語版は、韓国の学者達に大変な衝撃を与え、北朝鮮とは異なる文脈で恵岡思想を理解せねばならないという喫緊の必要性和使命感とを抱かせた。その結果が1965年に朴鍾鴻によって恵岡に与えられた「経験主義思想家」という評価であった。

第2に、恵岡の思想体系は、恵岡自身が「気学」とも名づけたように、「気」に基づいて宇宙や人間に関する諸問題を解明しようとする独特な、かつ壮大なものであった。彼の思想は、彼の重要な著作である『氣學』及び『氣測體義』から理解できる。『氣測體義』は『神氣通』や『推測録』で構成されている。『神氣通』では主体と客体を同一な「気（神気）」であると把握しながら、主体が客体と「通」するチャンネル（形質通）、理想的な「通」（周通）、その「周通」に至る方法論としての「変通」等の概念を紹介している。『推測録』はこの「周通」に至る具体的な認識理論として「推測」過程について叙述している。この「推測」は認識論的な観点からは、感覚データや様々な外部データが人間の感覚器官を通るとき、そのデータに関する因果関係が分析され（推）、その分析されたデータに基づいて認識の主体が次のデータや行為を予想する（測）と理解される。また「推測」における最も重要な要素は、「推」に検証過程が含まれていることである。この検証過程重視の思想傾向は、自然と西洋科学、特に天文学を積極的に受容する原因となった。

第3に、思想史的な観点は、恵岡の「気学」は、朝鮮儒学の「理氣論」の弱点であった「気」の本質や属性を究明したことが、朝鮮儒学史上で大変重要であると位置づけられる。恵岡は『氣學』の中で「気」の属性を「活」、「動」、「運」、「化」、すなわち、生命性、運動性、「気」の循環、「気」の変化であると解明している。このような「気」概念の探求は、朝鮮儒学の「理学」伝統から見れば異端的な思想体系であるともいえるが、むしろ「理氣論」の「気」の側面を極限まで探求することで、朝鮮儒学史において「理」と「気」に関する実験を結論付けたともいえるだろう。

本稿は恵岡の思想を日本の読者に紹介することを主な目的としているために、恵岡の思想の起源や、当時の東アジアの思想動向からの影響等に関しては詳細に叙述することができなかった。しかし20世紀以後の朝鮮半島の思想研究は、日本の文献や思想史的方法論の影響を直接的間接的に受けており、これは今後の韓国（朝鮮）思想史研究において、より考慮されるべき重要な論点であろう。また、恵岡の「通」理論には仏教と類比されうる要素があり、恵岡の思想を通じて仏教と儒学、あるいは「心学」と「気学」との認識理論の具体的な比較研究が可能だろうと思われる。これらに諸点については今後の課題としたい。

註

- 1) 恵岡の思想が「気学」と言われる以上、中国の思想とも比較が必要であるが、そのためには、朝鮮儒学とは何か、という大きな問題を先に解決しなければならない。しかし、朝鮮儒学の定義に関する問題は本稿の範囲を超えるため、朝鮮儒学のパラダイム内に限って論議を展開する。中国

儒学と朝鮮儒学との関係に関しては、筆者の以下の博士論文を参考していただきたい。Byung-Kun Park, “Hyegang Ch’oe Han-gi (1803–1877): The Development of His Philosophical System,” Ph.D. Dissertation, The Australian National University, 2004.

- 2) 恵岡に関する日本語論文はあまり見当たらなかった。金容沃（高熙卓訳）「朝鮮思想史における崔漢綺の位相への試論」（『季刊日本思想史』第66号、ペリカン社、2004年、156–179頁）が本格的な恵岡研究としては唯一の論文であった。そのため本稿は主として韓国語（朝鮮語）の資料に依拠しているが、可能な範囲で英語の資料も使用した。
- 3) 恵岡の著作は以下である。『竝舛』（1829年、エッセイ集）、『農政會要』（1830年、農業技術や政策）、『陸海法』（1834年、灌漑論）、『素謨』（1835年、中国歴史、消失）、『氣測體義』（1836年、哲学）、『講官論』（1836年、政治家のための道德書）、『鑑枰』（1838年、官吏登用のための指針書）、『儀象理數』（1839年、天文学）、『心器圖說』（1842年、機械工学）、『疏筭類纂』（1843年、上疏文の編集書）、『習算津筏』（1850年、近代数学）、『宇宙策』（1857年、天文学、消失）、『地球典要』（1857年、地理学）、『氣學』（1857年、哲学）、『明南樓隨錄』（1857年、哲学エッセイ集）、『人政』（1860年、人事行政）、『運化測驗』（1860年、天文学）、『身機踐驗』（1866年、医学）、『星氣運化』（1867年、天文学）、『承順事務』（1868年、哲学）、『郷約抽人』（1870年、地方政治論）、『財教』（1873年、経営学、消失）。現存する恵岡の著作は、大東文化研究院編集の『増補明南樓叢書』（全5巻、ソウル：成均館大学出版部、2002年）にまとめられて刊行されている。
- 4) 恵岡は、少年期に彼の外祖父であり、高名な学者であった韓敬履（1766–1827）と、有名な儒学者であった金憲基（1774–1842）とに学んでいる。思想史的な系譜を辿ると、恵岡が「先生」と呼んだこの2人の学者は趙有善（1731–1809）の弟子であり、趙有善は金元行（1702–1772）の弟子で、金元行は金昌協（1651–1708）の孫、金昌協は宋時烈（1607–1689）の弟子、宋時烈は金長生（1548–1631）の弟子、金長生は李栗谷（1536–1584）の弟子であった。このことから恵岡は栗谷系の学風の影響を受けたともいえるが、彼の学問の脱性理学的な性格から見ると、そのような断定はできない。しかし、少なくとも恵岡の学問の基礎的な素養は韓敬履と金憲基から得たと考えてよいだろう。
- 5) 鄭鎮石・鄭聖哲・金昌元『朝鮮哲学史』巻1、ソウル：カンジュ、1988年、269頁。
- 6) 朴鍾鴻「崔漢綺の経験主義」アセアムンゼヨングソ編『実学思想の探求』ソウル：ヒョンアンサ、1974年、318頁。
- 7) 「毛沢東主義」を中国哲学史に適用した代表的な著作が1956年から1958年まで書かれた侯外廬、趙紀彬、杜国庠編『中国思想史』である。この本で中国の学者は「氣の思想」を「唯物論」に並置し、王充（27–97）は「氣の思想」あるいは「唯物論」の開祖として、張横渠（1020–1077）は「氣の思想」や「唯物論」の完成者として評価した。この流れは王夫之（1619–1692）と戴震（1723–1777）まで続く。金容沃、『동양학 어떻게 할 것인가 [東洋学いかにすべきか]』トンナム、1986年、225–253頁参照。
- 8) 徐敬徳（1489–1546）と任聖周（1711–1788）は各々「主氣論」や「唯氣論」を主張した「唯物論思想家」として紹介されているが、彼らは「氣」の属性の探求までは至らなかった。
- 9) 鄭鎮石・鄭聖哲・金昌元（宋枝學訳）『朝鮮哲学史』弘文堂、1962年、325頁。
- 10) 恵岡の名前は、最初の朝鮮儒学者の伝記ともいわれる張志淵（1864–1921）の『朝鮮儒教淵源』（1917年4月5日から12月11日まで『毎日申報』に連載）にも載っていない。また、近代の朝鮮儒学研究者、高橋亨（1878–1957）が1929年に『朝鮮支那文化の研究』で発表した論文「李朝儒

学史における主理派主気派の発達」にも、玄相允(1893-?)の『朝鮮儒学史』(1949年)にも、恵岡の名前は出てこない。もちろん、崔南善(1890-1957)や文一平(1888-1949)の歴史的な著作には名前だけ登場している。このようなことから、恵岡が思想家として朝鮮儒学史上に登場したのは、『朝鮮儒学史』が初めてであったとしか考えられない。

- 11) 朴鍾鴻「崔漢綺の経験主義 [崔漢綺の経験主義]」亜細亜問題研究所韓国研究室編『実学思想の探求 [実学思想の探求]』玄岩社、1974年、362頁。引用は筆者訳。この論文は1965年の『亜細亜研究』8巻4号に初めて発表された。
- 12) 筆者は2つの点から李佑成の評価には無理があると考え。まず、恵岡の思想は所謂実学者や開化思想家の間で知られていなかった。次に、朝鮮の所謂実学の開化思想への影響力は強くない。朝鮮の実学の時代は18世紀前半から19世紀後半までいたる。代表的な学者は李瀾(1681-1763)、朴趾源(1737-1805)、丁若鏞(1762-1836)、金正喜(1786-1856)などであるが、恵岡の名前は前述の学者や文人の文集に出てこない。また、恵岡自身の著作にも彼らに関する言及は見つからない。

実学は伝統的な朱子学の性理説から離れて(脱性理学)、現実的な思考へ転換しようとする思想運動であると言われている。李佑成自身が述べたように、「実学が……自我の自覚によってわが国の実地・実情に立脚した実際的な思考で成立されていたのか、が最も重要である」、という理解からすれば、実学は開化思想を導入・摂取する土台であるとも考えられる。しかし当時の開化思想家であった金允植(1835-1922)、金玉均(1851-1894)、兪吉濬(1856-1914)、朴泳孝(1861-1939)、徐載弼(1864-1951)などが抱いていた開化のモデルは中国の洋務運動や日本の明治維新であったという史実からして、開化思想が実学という歴史的動向から直接的な影響を受けたとは言にくい。朝鮮半島に実学という動きが起きたとするならば、実学と開化思想は思想史的には別の動きであると考えたほうが良いと考えられる。以下の文献を参照されたい。歴史学会編『実学研究入門』ソウル：一潮閣、1973年、1-17頁。韓国哲学会編『韓国哲学史』ソウル：東明社、1992年、83-166頁。韓国思想史研究会編著『실학의 철학 [実学の哲学]』ソウル：イェムンソン、1996年、17-45頁。韓国哲学史研究会『한국철학사상사 [韓国哲学思想史]』ソウル：ハヌルアカデミ、1997年、345-363頁。

- 13) 鄭聖哲『실학파의 철학사상과 사회정치적 견해 [実学派の哲学思想と社会政治的な見解]』ソウル：ペクウイ、1989年、546頁。
- 14) 民族文化推進会『국역 인정 [国訳人政]』ソウル：民族文化推進会、1977年、1-18頁。
民族文化推進会『국역 기측체의 [国訳気測体義]』ソウル：民族文化推進会、1979年、1-24頁。
- 15) 藏書閣は朝鮮時代の宮中図書館であった。藏書閣の図書は韓国の文化財管理局が管理してきたが、1981年以降は韓国精神文化研究院に管理が移譲され現在に至っている。最近はインターネットでも資料検索が可能である。所蔵本の一部は朝鮮戦争の際に北朝鮮側に接収された。
- 16) 2000年に至ると、恵岡に関する修士・博士論文は100編を超えている。日本語の論文としては、1990年に出版された金容沃の『讀氣學說——최한기의 삶과 생각 [読気学説——崔漢綺の生と思想]』(トンナム、1990年)の日本語訳が『季刊日本思想史』第66号(べりかん社、2004年)で「朝鮮思想史における崔漢綺の位相への試論」(高熙卓の翻訳)という題目で156-179頁に掲載されている。訳者は付記で、「これが従来の崔漢綺論のもつ哲学的なアプローチや発展段階論による近代性探求方式の研究に対して、歴史的・認識論的な問題提起を投げかけ、崔漢綺研究の活性化を引き起こしただけでなく、朝鮮思想史研究の方向転換にも深くかかわっているからである」と評価している。

- 17) 『神氣通』卷一（一丁オ）。
- 18) 山井湧氏は、宋学の「気」は物質の根源という形で意識して存在論の中に組み入れられた、と評価しながら、次のように気概念を説明している。「気は天地の間に遍満して存在する。天地そのものも、天地も間に存在する万物も、みな気によって構成されている……人その他の生物も気によって身体ができて……その気の力によって、人その他の生物は、自己の生命を維持し、生殖して生命を伝え、また活動することができる。視力・聴力等等も諸能力、感情・欲望・思考等等の心の機能も、いずれも気から生ずる」。山井湧「理気哲学における気概念」小野沢精一・福永光司・山井湧編『気思想』東京大学出版部、1978年、356-357頁。
- 恵岡の「気」に対する認識が伝統的な概念と異なるのか、ということより、恵岡は「気」に関する伝統的な認識を証明しようとした、ということ恵岡の「気学」の意味があると考えられている。
- 19) 恵岡自身が「認識」という単語を使ったことはない。代わりに「通」という概念を使っている。つまり、恵岡の認識理論としては、「活、動、運、化」している外部世界の中で、「活、動、運、化」している対象を、「活、動、運、化」している主体がどのように「通」（認識）するか、という意味である。
- 20) 当時、北京で本を出版するというは大変なことであった。『氣測體義』の出版本の活字体や編集の方法から見ても、高価な本であったと推測される。なぜ、いかにして、恵岡が北京でこの本を出版したかはまだ明らかになっていないが、筆者の考えでは、恵岡がそれだけ自分の学問について自信があったことのあらわれではないか。つまり当時の学問レベルから見ても、自らの思想の適用範囲が広いと考え、客観的に検証することを希望したのではないだろうか。
- 21) 『神氣通』卷一（八丁ウ）。「所云通者指其通氣之大略也。通之者指其精力鑽究期達於彼也」。『神氣通』卷一（一丁ウ）。「蓋能通之者氣之力也。所欲通者障蔽之事物也」。
- 22) 「大凡一團活物 自有純澹澄澈之質 縱有聲色臭味之隨變 其本性則不變 舉其全體無限功用之德 總括之曰神」。『神氣通』卷一（一丁ウ）。詳しく言えば、「神」は「気」の機能のひとつであり、人間の精神現象だけに限らないが、認識論的には精神現象に当たると考えられる。
- 23) 「神氣」が人間や宇宙を説明する基本概念ならば、「神氣」の属性から次の質問が引き出される。宇宙は精神的な要素を持っているのか。恵岡の思想体系では宇宙が人間のように精神的な要素を持つとはいえない。それ故に恵岡は『氣學』から「神氣」の代わりに「運化気」という概念を使用し始める。この問題については Byung-Kun Park, “Hyegang’s *Sin-gi: Emphasis on Chucheuk*,” *Korea Journal*, vol. 45, no. 2 (Summer 2005), 216-238 を参照していただきたい。
- 24) 「形質通」は感覚器官とほかの身体器官を含めて、外部世界との双方関係を結ぶ手段である。つまり、外部世界を認識することだけではなく、外部世界に影響を与えることも含まれている。具体的には「目通」、「耳通」、「鼻通」、「口通」、「生通」、「手通」、「足通」、「觸(触)通」がそれぞれ、それぞれの身体器官によって外部世界との関係を結ぶ、という意味である。「生通」は人間の生殖に関することで、恵岡には、子供を産出すること自体が外部世界との関係を結ぶことであると認識されている。
- 25) 『推測録』卷一（六丁オ）。
- 26) 詳しい意味については Byung-Kun Park, “Hyegang Ch’oe Han-gi (1803-1877): The Development of His Philosophical System,” Ph.D. Dissertation, The Australian National University, 2004, 161-163 を参照されたい。
- 27) 『推測録』卷一（一丁ウ）。「以爲證援之斷案此便是推也」。また、『推測録』卷一（四八丁ウ）。

「無推之測不以爲知無驗之測亦不以爲知」。

- 28) 『氣學』 卷二 (四丁ウ)。
- 29) 『氣學』 卷二 (三二丁オ)。
- 30) 惠岡は従来の中華思想、つまり「世界の中心は中国である」という偏狭的なイデオロギーから離れて、西洋文明の存在に積極的な興味を示したと評価することが可能であるが、その原因としては時代的な背景も考慮にいれなければならない。これは 19 世紀の東アジアの国際情勢分析に関わる幅広い問題である。本稿では、可能なかぎりこの問題意識を保ちながら、惠岡の思想的な面を中心として論じるものである。
- 31) 惠岡の「気学」については、朱子学の解体であるともいえるが、筆者はむしろ朝鮮朱子学の頂点であると考えている。朝鮮朱子学の伝統は、中国朱子学の理気論に基づいて「理」の研究を深化した退溪の「理学」であると評価されているが、その反対の「気」の研究は惠岡によってようやく行われた。すなわち、惠岡に至ってようやく朝鮮儒学は中国朱子学の「理」や「気」の両方を究明したということになる。
- 32) 『氣學』 卷一 (一七丁ウ)。
- 33) 金憲基 (1774-1842) の手紙によれば、「経典をもっと深く勉強し、急ぐ出版は自制すること」と書いていることから見ると、惠岡はすでに 20 代には西洋科学書に関する自己流の解釈書の出版を求めていたと考えられる。詳しくは、權五榮『崔漢綺의學問과思想研究 [崔漢綺の学問と思想研究]』ソウル、ジンムンダン、1999 年、57 頁参照。
- 34) これは惠岡の認識理論である「推測」という概念と直接に繋がっている。つまり、「推」という概念は必須的に「證驗」という検証過程を要求する。
- 35) Fung Yu-lan, Derk Bodde trans., *A History of Chinese Philosophy*, vol. 1 (Princeton: Princeton University Press, 1983), 31 参照。
- 36) 蓋天説に関して略述すれば、北極を中心として「天」は丸くて上に位置し、「地」は四角で下に位置している、という天文観である。渾天説は直接に卵に比喻できる。すなわち「天」は卵の皮に、「地」は卵黄に相当する。
- 37) 『論語』における「天」の意味構造については筆者の修士論文、Byung-kun Park, “Confucius’s Heaven: His Ontology and Methodology” (Seoul: Yonsei University, 1996) を参照されたい。中国天文観や天地の意味に関しては、拙稿、『『日本書紀』神代巻における「天地」の意味すること——易経を中心として』『哲学会誌』第 29 号、学習院大学哲学会、2005 年、73-92 頁を参照されたい。
- 38) 『推測録』 卷二 (五丁ウ)。『推測録』は、惠岡が 33 歳の時に執筆された。若いときからヨーロッパの天文学の影響を強く受けていたことがうかがえる。
- 39) これは惠岡の著作のすべてに見られることであるが、例として、Benjamin Hobson (1816-1873) 著の医学書である『全體新論』と惠岡の『身氣踐驗』の文章を比較してみたい。『全體新論』の卷二には人間の創造に関する次のような表現が出てくる。「原始造化、撮土爲人、命曰亞當」。一方、『身氣踐驗』の卷二では「資頼天地神氣運化、承順父母神氣運化、有此身之成機」になっている。このように「唯一絶対神」を意味する「造化」が「神氣運化」という惠岡独自の哲学用語に置き換えられている。より詳細な例証については李賢九『崔漢綺의氣哲學과西洋科學 [崔漢綺の氣哲學と西洋科学]』ソウル、ソンギョクカン大学出版部、2000 年、63-97 頁参照。
- 40) 朝鮮儒学史上、実際に主理派・主気派が存在していたかどうかに関しては議論の余地がある。この問題については筆者が別の論文を準備しているが、要約すれば、高橋の主理派・主気派の分類

法は明治思想界の動向と結びついており、主理派・主氣派は歴史的な実体として存在したというよりも、歴史記述論的 (historiography) な観点から見るとそのように分類できる、ということである。

- 41) “In the first place, if the organic view of the universe is really founded on the basis of *ki*’s being subject to generation and destruction, there should be a fundamental explanation of this characteristic in *ki*. In this respect, though it may seem far-fetched, there should also be presented some theory of life itself.” 引用は筆者訳。Youn Sa-soon, “T’oegye’s Identification of “To Be” and “Ought”: T’oegye’s Theory of Value,” Wm. Theodore De Bary and JaHyun Kim Haboush eds., *The Rise of Neo-Confucianism in Korea* (New York: Columbia University Press, 1985), 237.
- 42) 『氣學』 卷二 (三十丁ウ)。
- 43) 『氣學』 卷二 (二二丁オ)。
- 44) 『氣學』 卷二 (二一丁オーウ)。